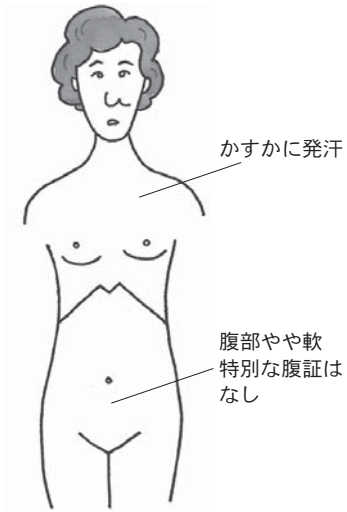
桂枝湯（けいしとう）

方　意

太陽病の中風証の主方であるとともに，衆方の祖とされており，漢方の最も基本的な処方である。

風寒の邪が太陽経脈を侵し，肌表で衛気と争うのを，発汗解肌により治す。

衛陽と営陰の不和を治すので，傷寒だけでなく雑病にも広く用いられる。



桂枝湯証

主証：頭項強痛，汗出て発熱悪寒する。

客証：鼻汁・鼻閉・咳嗽・身痛・嘔気など。

脈は浮緩。舌は正常。

特別な腹証はない。

臨床応用

感冒初期のいわゆる鼻カゼ症状，虚弱者や老年者の万年カゼ。

産後や病後の微熱・倦怠感・寝汗・自汗など。

運用の要点

表寒虚証（発熱悪風・自汗・脈浮緩）に用い，表実無汗・表寒裏熱・表熱有汗などの実証には禁忌。

主な加減方との鑑別

桂枝加附子湯（第 20 条）：発汗過多，小便難，四肢微急，屈伸難。

桂枝去芍薬湯（第 21 条）：下後，脈促，胸満。

桂枝麻黄各半湯（第 23 条）：太陽病，如瘧状，熱多寒少，身痒。

桂枝加厚朴杏子湯（第 43 条）：太陽病，微喘。

桂枝加芍薬湯（279 条）：本太陽病を誤下，腹満時に痛む。

原　典

太陽ノ中風ハ陽浮ニシテ陰弱。陽浮ノ者ハ熱自ラ発ス。陰弱ノ者ハ汗自ラ出ズ。嗇嗇トシテ悪寒シ，淅淅トシテ悪風シ，翕翕トシテ発熱シ，鼻鳴リ乾嘔スル者ハ桂枝湯之ヲ主ル。（太陽病上篇　第 12 条）

太陽病，頭痛，発熱シ，汗出デ悪風スルハ桂枝湯之ヲ主ル。（同　第 13 条）

病常ニ自ラ汗出ズル者ハ，此栄気和スト為ス。栄気和ス者ハ外諧サズ，衛気栄気ト共ニ諧和セザルヲ以テノ故ニ爾ラシム。栄脈中ヲ行キ衛脈外ヲ行ルヲ以テ。復タ其ノ汗ヲ発シ栄衛和スレバ則チ愈ユ。桂枝湯ガ宜シ。（太陽病中篇第 53 条）

（そのほか，24・25・42・44・54・56・57・91・95・234・240・276・372・387 条も参照）

方　解

君薬：桂枝３両（4.0ｇ）　辛甘，温。発汗解肌の作用により風寒の邪を発散させるとともに，営衛を調和させる。

臣薬：芍薬（白）３両（4.0ｇ）酸苦，微寒。営陰を補って強化し，過剰な発汗を抑制する。

佐薬：甘草２両（2.0ｇ）　甘，平。汗剤に入れば解肌・抗利尿に働き，姜・棗ともに津液を保護し，営衛陰陽を調和させる。

使薬：大棗12 枚（4.0ｇ）　甘，微温。姜・棗は相須の関係でともに脾胃を補う。大棗は芍薬を助ける。

生姜３両（4.0ｇ）　辛，温。生姜は桂枝を助けるとともに嘔を止める。

＊注　芍薬には白芍薬と赤芍薬があるが，本方には必ず白芍薬を用いる。

桂枝は性味は辛甘温で発汗解肌の作用があり、体表の衛陽を温通します。

白芍薬は味は酸、性は微寒で陰血を滋養する作用があるので、営陰を固めます。桂枝と芍薬を等量ずつ合わせると、肌表の風邪を発散し、営衛を調和させることができます。

辛温の生姜は桂枝の発散作用を助け、甘温の大棗は営陰の虚を滋養し芍薬を助けます。姜棗合わせて、脾胃を補いながら営衛の調和を助けます。

甘草は甘平で脾胃を補い、陰陽を調和するために用いられています。

すべて病は陰陽の不調和によって起こるといっても過言でありません。桂枝湯は営衛を和し、気血を調え陰陽の調和を回復させるという漢方薬の薬効の典型を、わずか五味の処方の中に具体化しています。それゆえに作者は、『傷寒論』の冒頭にあえてこの方を提示し、後世の人々は本方をもって衆方の祖として処方構成のお手本とするのです。

本方は、少しばかり発汗させることによって体表の邪を発散し、営衛を再び調和させることを目的にして